View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by CORE

藤女子大学紀要，第 48 号，第II部：85-95．平成 23 年．
Bull. Fuji Women's University, No. 48, Ser. II: 85-95. 2011.

本居宣長におけるいのちの視野

── 栄養療法の知的枠組についての研究 8 ──

藤　井　義　博

Abstract

This study was an attempt to examine the scope of life as presented by Motoori Norinaga (1730-1801) in *A Farewell Address to To Bunyo on his Return to Hizen*, a treatise on medical philosophy at the age of 27, and *The Two Shrines of Ise: An Essay of Split Bamboo (Ise Niku Sakitake no Ben)*, an essay written in the last years of his life. The unique characteristic of his medical philosophy consists in his understanding that immeasurable vital energy (*ki*) cannot be supplemented, but only nourished in nature. The means of nourishing vital energy in daily life include eating light, constant labor, and the doing away with worrying oneself with thoughts. The mission of physicians consists in administering medicine so as to nourish vital energy upon sensing the power of the genuine vital energy (*shin-ki*) in patients. As a physician, Norinaga comprehended that the origin of medicine lies in the respect for vital energy, the power of which a physician is able to sense in patients. As a man of letters, Norinaga grasped the genuine way of life in which people feel respect for the blessings and beneficence of Amaterasu Omikami, the Sun of the Heavens, and Toyouke no Okami, the originating spirit of grains and food upon which life depends. Respect for unseen essential powers, such as vital energy and spirit, underlies his vision of life as consistently expressed in *A Farewell Address to To Bunyo on his Return to Hizen* and *The Two Shrines of Ise: An Essay of Split Bamboo (Ise Niku Sakitake no Ben)*.

1．はじめに

本論文は、本居宣長（1730-1801）が京都での医学修行後、27 歳にて記した医論「送藤文輿還肥序（藤文輿肥に帰るを送るの序）」とライフワークの古事記伝を全巻終了した頃である 69 歳にて記しその 3 年後の死の前月に刊行された「伊勢二宮さき竹の辨」におけるいのちの視野を検証する試みであった。

1.1．本居宣長の生涯へのアプローチ

医者かつ国学者として深い思想を湛える本居宣長という人間を深く理解するためには、宣長に至る祖先の足跡を追うとともに彼を取り巻いていた宗教的環境についても知っておく必要がある[1]。宣長は、江戸時代の初め以来伊勢松坂において木綿商を営んでいた小津家の出身である。武士の本居武秀（1591 年死亡）の子の小津七右衛門（1647 年死亡）によって商家の小津家が築かれた。その息子で宣長の曽祖父である小津三郎右衛門は商家を発展させ、江戸に 3 店の木綿問屋を開いた。そして祖父の三四右衛門（1729 年死亡）のときに全盛期となったが、彼の実子が若くして亡くなったので、後に宣長の父となる定利を養子として迎え、実の娘栄珠を妻とした。彼女には前夫との間に一子がいた、すなわち後に宣長の義兄となる定冶である。しかし栄珠は 1728 年に没したため、定利は後妻として村田勝を迎えた。定利と勝の間の第一子が宣長である。

宣長の家は代々浄土宗で、松坂の樹敬寺を菩提寺としていた。曽祖父の小津三郎右衛門および祖父の三四右衛門がともに信仰熱心であり、父の定

Yoshihiro FUJII　藤女子大学人間生活学部食物栄養学科　藤女子大学大学院人間生活学研究科食物栄養学専攻

利も誠実な浄土宗信者であった。母の勝は浄土宗の村田家の出で、宣長が33歳で結婚した1762年に剃髪した。母の長兄は幼児より出家し、宣長の妹はんは、1761年に30歳で尼となった。もうひとりの妹しゅんは、夫と死別してから尼となった。母の弟も晩年に剃髪した。とくに老年における剃髪は、多くの敬虔な仏教への信仰心の篤い家では習慣的な行為であったが、宣長の家ではそれ以上に行なわれていたのかもしれない[2)]。

1.2. 宣長の生涯の足跡

英文で詳細に著述することにより宣長の思想の全体像を西洋社会に紹介した松本滋は、宣長の思想は確立された知の体系として捉えるよりも長い成長の過程と見るときに最もよく理解されるとして、その生涯を4つのステージに分けている[2)]：(1)小児・青年期（1730-1751）：出生から22歳まで；(2)若年成人期（1752-1763）：23歳から34歳まで；(3)成人期（1764-1780）：35歳から51歳まで；(4)老年期（1781-1801）：52歳から72歳の死まで。このステージ分類に従って宣長の足跡を辿る。

宣長の小児・青年期においては3つの事件が注目される。ひとつは、1740年の宣長11歳のときに父定利が死去し、遺言に従って義兄の定治が家を継いだことである。二つ目は、1748年19歳のときに伊勢山田の紙商の今井田家に養子となり、「ねがふ心にかなはぬ事有しによりて」（家のむかし物語）2年余り後に今井田家を離縁したことである。そして三つ目は、定治が1751年に死去したため、宣長は思いがけず家督を継ぐこととなったことである。

宣長の若年成人期は、1752年23歳の年の上京に始まる。これは家業再建を兼ねた医学修行のためであった。京都では堀景山に入門、寄宿し儒学を学ぶとともに、姓を屋号である小津から、小津家祖先の武家であった本居に改めた。1753年24歳にて医学を学ぶために堀元厚に入門し、翌1754年には武川幸順に入門し、小児科医学を学んだ。1755年3月3日、26歳の節分の日を期して、名を本居栄貞から本居宣長へ改め、号を春庵と称するようになった。1756年宣長27歳の3月に、友人で医者の藤文輿が肥前国大村に帰る時に贈った「送藤文輿還肥序」（藤文輿の肥に帰るを送るの序）という医論を成している。5年7ヶ月の京都での医学研鑽を終え、1757年10月に28歳で松坂に帰着し、医者として開業した。以後小児を中心に患者を診る傍ら、国学の研究と教育に従事した。1763年34歳のときに賀茂真淵と対面し、また在京以来の研究の成果である「紫文要領」と「石上私淑言」を成した。

宣長の成人期と老年期には、35歳頃から35年をかけて行なわれた「古事記伝」の執筆が含まれる。また、63歳のときには、松坂に住みながら紀州徳川家に仕官し、古典の講釈をおこなった。1798年69歳のときに「古事記伝」を全巻終了した同じ年に、「伊勢二宮さき竹の辨」を成し、1801年8月に刊行されたが、それから間もない9月29日に宣長は72歳をもって永眠した。

1.3. 臨床医としての宣長

1755年3月3日26歳の京都における節分の日は宣長にとって特別な意味のある日であった。すなわちこの日を期して、名を本居栄貞から本居宣長へ改め、号を春庵とするとともに、「稚髪（ちはつ）（薙髪）」すなわち髷（まげ）を切って医者としての髪型になった。この頃の母の書簡の内容から、江戸時代の医者が通常用いていた十徳（じっとく）姿で脇差を差して、実際の医療に従事していたことが理解される。これは医者として世に立つことを形として明確に示したことと解釈できる[3)]。宣長は、1758年29歳の頃から晩年にいたるまで故郷の松坂の医師として診療した。宣長が書き継いだ「済生録」という、その日の天候、患者名、症状、投薬、およびその薬料などを記した診療録兼帳簿を見ると、永眠する10日前まで診療していたことがわかる。年齢は全く記されていないが、患者名に付けられた職業や身分があることなどから、小児科医としてだけでなく内科医としても診療していたことがわかる。また「小児　胎毒丸」、「家伝秘法　むしおさへ」、「家伝　あめぐすり」などを調合して販売していた。日中は診療に当て、夜間は国学の研究と講義に当てていた。

1.4. 本論の仮説と目的

27歳のときの医論「送藤文輿還肥序」に表明されたいのちの視野は晩年に至るまで一貫して変わることがなかったという仮説を、69歳で成し72歳の死の前月に刊行された「伊勢二宮さき竹の辨」におけるいのちの視野と比較することで検証する。

この仮説が実証されるならば、宣長は医療と国学を同じいのちの視野において追究したことの傍証となり、医者兼国学者としての宣長の生き方の一貫性を裏づけるであろう。

2．資料と方法

本居宣長の著作のテクストとして、「本居宣長全集」全20巻、別巻3巻(筑摩書房、1968〜1993年)を用いた。

3．送藤文輿還肥序

「送藤文輿還肥序」は、前述したように宣長27歳のときの堀景山同門の友人の医者、藤文輿が肥前に帰郷するに際しての送別の辞である。文は、字数およそ1700字程度の白文すなわち句読点・返り点・送り仮名などのついていない漢文である[4)]。そのうち、実際の送別の辞は最後の100字余りに過ぎず、残りは全て彼の医論の展開であることから、「送藤文輿還肥序」は宣長唯一の医学に関する文でもある[5)]。この医論に述べられている内容から、宣長の生命観を読み解く試みを行なった。

3.1．黄帝内経(こうていだいけい)の難解さ

宣長は、「素問(そもん)」と「霊枢(れいすう)」は、今日ではもはや内容の把握が難解であるため、後人による種々の解説がなされているという事実の記載から文を始める。伝説上の人物である黄帝が書いたと言われる中国最古の医学書である「黄帝内経」は、黄帝と臣下の医師との問答形式にて記載されており、自然哲学的な医学論が中心の部分を「素問(そもん)」といい、鍼灸(しんきゅう)による治療について書かれている部分を「霊枢(れいすう)」という。種々の解釈のうちとりわけ近方家(後世家)と総称される、中国の金元の時代の李東垣(りとうえん)と朱丹溪(しゅたんけい)の解釈による李朱医学がもちいられてきたことを述べる。さらに近方家が尊ばれるなかで、日本では黄帝内経などの原典を無視して、後漢末期の頃の張仲景の「傷寒論」などを参考にした日本流漢方の一派すなわち古方家が現れたことを述べる。

宣長は近方家にも古方家にも多くの共通した誤りがあることを指摘する。

3.2．一医人とその処方を絶対視してはいけない

宣長は、近方家も古方家も過去の一医人とその処方を絶対視する点において共に誤っているという。すなわち近方家は「李朱を視ること聖人の如く」であり、古方家は「長沙（張仲景）を診ること神の如し」である。治療法の優劣は時代とともに変化するにもかかわらず、近方家古方家ともに時代の変化を省みないで、昔の一医人を絶対的権威として昔の治療法を正しいとする偏執の誤りにおいては五十歩百歩である。薬により人を害する古方家より近方家の平穏無力の薬のほうが勝っているとはいえ、人の病は世とともに変わり、地とともに異なり、治療法もまた同じであり、杓子定規で臨機応変を知らない者とはともに治療を語るに足らないと述べる。

3.3．気が病を治す主体である

宣長は、近方家も古方家も薬（漢方薬）でもって病を治そうとしていることが誤りだという。薬ではなく、「ただ熙然(きぜん)（広く行き渡る）たる一氣ひとりよく病に抗してこれを制す」、つまり気が広く行き渡って働いて病を制するという。この気の特徴は「その気たるや神にして測るべからず」、すなわち眼に見えない妙なる働き、人知で把握できない妙なる理である。このように宣長は、近方家も古方家ともに、それぞれ一医人にすぎない李朱と長沙（張仲景）を神の如く診ていて、「神にして測るべからず」という気を察することができなくなっていることを指摘する。しかしながら身に気を充満しているのは、元々天からこの気を授かったからであり、後世の人はこの状態を「元気」といっている。この気があって生体となり、無ければ死体となってしまう。死と生とはただこの気が有るか無いかだけの違いである。このように生命の根本をなす気を察することを、中国の医者も日本の医者もともにできなくなっていることを宣長は指摘する。

3.4．医者の仕事は真気の勢いを察すること

宣長は、近方家や古方家の主張と違って、医者が病を治す主体ではないという。すなわち気が病を治すことができないならば、医者といえども如何ともしがたく、ましてや漢方薬によってなんとかなるものではないという。それならば治療において医者が行なうべき大事な仕事は何かというと、

それは「真気の勢を察すること」であるという。つまり病を治すように働く真気と病を起こすように働く邪気のうちで、真気の勢いを察することが医者がまず行なうべきことである。真気の勢いを察したうえで、はじめて薬を使うのが正しい順序であるという。

3.5. 気は養うものであり、補うものではない

世の医者すなわち近方家は、温め補うことによって気を助けているが、古方家が病を攻撃することも気を助ける方法であることを知らないという。このように治療の方術はみな気を助けるものである。しかし気は養うことはできるが、補うことはできない。この点において補うことにとらわれた近方家の誤りがあるという。それならば養気の術は何かというとそれは「食薄くして飽かず、形を労して倦まず、思慮常に寡くす」であるという。すなわち食べ過ぎず、体を動かして飽きず、思い煩わないことである。そして「養気は医の至道なり、慎まざるべからず」という。医道の奥義は霊妙なる気を日常生活のなかで養うことにあるのに、古方家は薬で病を攻撃して人を害する誤りをなし、近方家は薬で気を補うという誤りをなし、ともに医の目的を達成していないことは、悲しいことであると宣長は結ぶ。

3.6. 宣長の医学哲学

医論「送藤文輿還肥序」における宣長の医学哲学は、生命の根本である気を養うことを中心に展開する。すなわち養気のための日常生活は、食べ過ぎず、体を動かして飽きず、思い煩わないことであった。そして医者の使命は真気の勢いを察したうえで、気を養うために薬を使うことであった。宣長によれば従来の医者は次の3つの誤りを犯している：(1)中国の医者も日本の医者もともに、それぞれ一医人にすぎない李朱と長沙（張仲景）を神の如く診るという誤り、(2)「神にして測るべからず」という性質の気を察することができないという誤り、(3)気は養うものではなく、補うものと考える誤り。このように宣長が気は補うものではなく、養うものととらえたのは、気を「神にして測るべからず」ととらえたからである。

宣長の気のとらえ方の視野を明確にするために、江戸時代だけでなく明治以降も現代に至るまで日本人の養生観に影響を与え続けてきている古典である「養生訓」(1713年)を著した貝原益軒（1630-1714)の気のとらえ方と比較して考察した[6]。貝原益軒によると、元気はもともと天地の万物を生む気であり、人間の体の根本であり、これがないと人間は生まれない。生まれてからは、飲食・衣服・住居などの外物の助けによって、元気が養われて命が保たれる。ここまでは宣長の元気の定義と同様である。しかし益軒は、全ての病は皆気より生じ、病とは気が病むことであるととらえ、元気を減らすかあるいは滞らせると、病に至るという。そして気は、年とともに少なくなるから、若いときから老年に至るまで元気を惜しむべきであり、とくに老人は気を減らすことを避けなければならないとする。このように益軒は、病気すなわち気が病む機序を(1)元気が減るあるいは(2)元気が滞ることととらえている。益軒の気は流動的かつ量的な勢いであり、測定可能な流体のような側面をもっている。一方、宣長の気は、身体に広く行き渡って働く、測定できない霊妙な勢いである。益軒は、気を量的な側面をもつと把握したので、気を量的に減らさないことを大切にした。宣長は気を量的な側面が欠如した純然たる質的な働きであると把握したので、気を養うことで気を良質にすることを大切にした。

宣長と益軒の気のとらえ方の違いは、診療対象の患者年齢層の違いを反映しているかもしれない。なぜなら宣長は、上記のように内科医としても診療していたが、主には小児科医として診療していたのに対して、益軒の「養生訓」における対象は小児から老人までを広く含んでいるからである。実際、益軒は年齢とともに元気が減ることを理由にとくに老人は気を減らすことを避けなければならないと指摘することを補足して、ただし子供は、衣服を厚くし、乳や食事に飽かせると、気が塞がって、必ず病が多くなり、うす着をさせ、食事を少なくすると病気が少ないといっている[6]。

宣長が調合して販売していた売薬の効能書の内容より、宣長がどのように薬と気との関係をとらえていたのかを窺い知ることができる。「家傳祕法むしおさえ」の効能書きでは、「蟲氣(むしけ)の身にある兒(こ)」の「平常に色青く心氣藥(こころなのし)ます、乳食(ちくひもの)を吐(はき)」など種々の症状を述べた後で、このむしほど害をなすものはないからこの「蟲氣(むしけ)」を取り去ることが大切であり、この毒が身体にとどこおっていると、年を経るにしたがってこの「蟲毒」自体から種々の病

気が起こるという。そしてこの薬を用いて「養育すれば、自然蟲くだけ下り、成長する事疑なし」という。ここでは「蟲毒」がとどこおることから種々の病気が起こるという病因論とともに、薬自体が蟲をくだいて下らせるのではなく、薬を用いて養育すれば自然に蟲がくだけ下ると述べていることが注目される[7]。また「家傳　あめぐすり」の効能書には、「經驗の功能左の如し」として、「男女大人小兒とも、大病長病にて虚脱羸瘦したるに用て、大に元氣を益し身體を補ふ」ことを述べている。ここでは、元気を益して身体を補うといっていて、決して元気を補うとはいっていない点に注目したい。また、この薬は少しだけ用いると即効は現れにくいこともあるかもしれないが、「漸々に補益の功有て、長く是を用れば自然に其效大也」と述べている[7]。すなわちゆっくりと補益の効果がでるので、長い間服用すると自然にその効き目が大きくなるという。このゆっくりとした補益の効果という点において、この補益とは、「元氣を益し身體を補ふ」という意味と解釈される。つまり補うのは元気ではなく身体であり、その結果として益すのが元気である。そして身体を補って元気を益す（盛んにする）ことが宣長がいう「氣を養う」ことの意味のひとつであると理解される。

4．伊勢二宮さき竹の辨

「伊勢二宮さき竹の辨」は上述したように、1798年宣長69歳の古事記伝を全巻終了した年に記されたエッセイである。宣長はその約20年前に古事記伝巻15において伊勢神宮の内宮と外宮の祭神をめぐる両宮論を記していることから、なぜこの時期に改めてこの問題についての文をしたためる必要があったのか。それは宛名不明の書簡にて、宣長が吐露している気持ちから推察することができる。すなわち外宮の祭神の尊さを世人は知らないで、吉見幸和（1673～1761）による伊勢神道の中心的文献である「神道五部書」を偽書とする「五部書説弁」を信じて外宮の祭神を卑しい神のように心得ることを嘆かしく思い、そうではないことを世に知らせようとしたのである。実際、門人の益谷末寿は「古事記伝」に示された両宮論に承服せず師の宣長を批判しており、また内宮と外宮の争いは絶えなかったことから、この問題を改めて論及すべき機が熟したとみて、自らの所信を世に問うたものであろう[8]。

4.1．知る人がなくなった「神代の傳説のこころ」

宣長は、「伊勢二宮さき竹の辨」の冒頭にて以下の5つの結論を述べる。すなわち伊勢の両宮のうち、(1)内宮の祭神は「天照大御神」であり、(2)それは太陽に他ならない、一方(3)外宮の祭神は「豐受大神」であり、(4)それは「天照大御神」が天上で重く祭っていた(5)「穀食の本元の御靈」である「御食津大神」である。宣長は上記5つの結論が、知る人がなくなった「神代の傳説のこころ」であるとして、それ以外の異説はみな誤りであるとする。そしてこの5つの結論のうち(1)だけは古来より異論がないが、他の4つの結論に関しては近来異説があるという。それがどういうことか、以下に宣長の根拠を記し、それを分析して考察した。

4.2．「天照大御神」は天津日（太陽）である

異説は「天皇の大祖にましませば、天津日なるべき理なし」との理由により、天照大御神は神代の大和の宮殿にて崩御された天皇を祭った神であるとする。宣長はこの異説の原因を「常理」すなわち「漢流の理」という枠組みだけで測って、これ以外の枠組みはないと思うこころにあるとする。そしてこの「近来の邪説」は、後世人の見方ではもはや把握できない意味のある見解すなわち「妙なる理」に基づかないことから生じたとする。古代には後世からはもはや理解しがたいが、確固たる見識が存在していたとするこの論法は、「送藤文輿還肥序」において古代の「素問」と「霊枢」が難解になったため行なわれている後世の近方家や古方家の見識では察することができない気すなわち測定できない霊妙な働きがあるとする論法と対応している。

天照大御神を神代に崩御された天皇を祭った神とみなすことは、「天上」すなわち大空に輝く太陽である普遍的な神を皇国だけの神に限定してしまって、その「御徳」と「御蔭」の広さをことさら縮めて狭く小さくしているという。なぜ外国では天津日（太陽）の「御徳」と「御蔭」を仰ぎ尊ぶことが行なわれないのか。宣長は外国では神代の正しい伝説がないために、知らないからだという。そして天照大御神が天皇の大祖であることだけを尊んで、天下万国の人々がみな今現在にその「御蔭」をこうむっている尊さを思わないのは、「い

と悲しきこと也」と結ぶ。一方、天照大御神が天皇の大皇祖神であることの尊さは、今さら言うに及ばぬこととする。このように宣長は天皇の大皇祖神として尊いと感じることは感情の事実、根拠のある事実として大切にするとともに、尊いと感じるべき恩恵を与える普遍的な働きの主体すなわち太陽神を尊いと思わないことはとても悲しいことだという。

4.3. 命をつづけたもたしむる食

天照大御神が豐受大神を天上で重く祭っていた「妙なる理」は、食物は豐受大神の「御靈（みたま）」より成り出て誕生し、毎年穀物が実るのはみなこの大神の「御徳御蔭」であるからである。豐受大神とは、「豐」は「贊称（たたえな）」であり「受（うけ）」は「食の義」であることから、食の大神という意味である。食物は世の中に数ある宝のなかで、「無上至極のたふとき寶」であると宣長はいう。命があって万のことがあるのだから、このことは、誰もよく知っていることだが、「ただなほざりに知れるのみ」であるという。そしてこのことを「心によくたもちて、眞實に深く知れる人のなきは、いかにぞや」と問いかけ、「主君父母の恩は、至て重く大なれども」、「食の恩も、又至て重く大ならずや」と恩恵を与える普遍的な食物の働きを尊く思うべきであると諭す。そして食を大切にする３つの伝統があることを宣長は述べる：⑴朝廷の重い公事などみな専ら食穀のことによる「御祭」である、⑵昔は、天皇だけでなく、下々の民間にいたるまでも、毎年新穀を食い初めることを、「新嘗」などといってたいへん大切なわざとしていた、⑶昔も今も上も下も、何事につけてもその礼式を行なうには、必ず食膳を調えてすすめて饗じることを大切にしている。なぜ人は食を大切にすることを忘れるのか。それを宣長は人の性（さが）に帰す。つまり「萬の事、馴てつねになりては、心もつかず、其御蔭のたふときこともわすれて、ただなほざりに思ひて過る」からである。そして凶作などにより餓死するときだけでなく、日常においても食事の時間が遅れて空腹のときには、「何事も思はれず、只食を思ふこと切ならずや」という。食が世間において重く尊いことに加えて、豐受大神の恵みの尊いことを、常々思って、忘れてはいけないという。

食物だけでなくなぜ豐受大神の恵みの尊いことを忘れてはいけないと宣長はいうのか。それは、食物は豐受大神の「御靈（みたま）」より成り出て誕生し、毎年穀物が実るのはみなこの大神の「御徳御蔭」であるからである。眼に見えるものとしての食物自体を重く尊ぶのではなく、食物を誕生させ実らせる豐受大神の眼に見えない「御靈（みたま）」の働きを察して重く尊ぶのが「神代の傳説のこころ」であるとする。

4.4. 皇國は、萬国の本つ國祖國（おやくに）

天津日（太陽）である天照大御神や万国の人々の命をつなぐ穀物の生み出す「御靈（みたま）」の主体である豐受大神が「神代に皇國に生出（なりいで）」たように、「萬の事の根元は、みな皇國より始まれること」であると宣長はいう。そしてすべて外国には神代の正しい伝説がないのに、日本にはそれがあることから、「皇國は萬国の本つ國祖國（おやくに）」であると判断する。中国古代の王である神農などが民に農業を教えて恵みをなしたというその根元はみな豐受大神の「御靈（みたま）」によることであるとする。

日本でも「正しき神代の傳説のこころ」は、みな隠れてしまい、知る人がなくなってしまった結果、「正しき神代の傳説」のない外国と同じ状態になってしまったと宣長は考えている。なぜなら「正しき神代の傳説のこころ」を失うと、すべての人の心が「直からずこざかしく枉（まが）りゆきて、何事も戎意（からごころ）にのみよる」こととなったからである。「戎意（からごころ）」は、「正しき神代の傳説のこころ」に直接接木（つぎき）できないほど異質なものと宣長はとらえている。言い換えると、宣長は中国の学問を学んでそれを日本固有の精神に即して消化する「和魂漢才」ができていないとしてそれを否定していることになろう。むしろ宣長にとって「和魂漢才」という考え自体が異論と等価である。なぜなら、「神代の傳説のこころ」とは、見える生命現象のなかに見えない神の恵みの働きを察し、それを大切に尊ぶこころであり、そのこころを「疑ふこともなく」生きることであったからである。

4.5. 中古と近代における異説の出現

宣長が批判する異説は、中古にできた異説と近代に出現した２つの異説の合計３つである。このうち、伊勢の内宮と外宮の祭神について「内宮外宮共に大祖にして、尊卑勝劣なき、同等の神のごとく説きなせる」のが、中古にできた異説である。そして外宮の祭神は「國常立尊（くにのとこたちのみこと）」であるとし

て、外宮を内宮よりも上にたてようとする説と、外宮の祭神である「御食津神」とは「膳部神」であるとして、外宮をおとして卑しい神にしようとする説が、近代に出現した異説である。宣長の異説批判の目的は、はっきりとしており、異説を「わきまへ正して」、豐受大神の「尊きまことの御徳を、あらはし奉むとする」ことであった。異説をどのように弁え正すのか、宣長はそれを論文のタイトル「伊勢二宮さき竹の辨」にこめている。「竹を二つにわりたる如し」ということわざの「こころばへをとりて」、「かたよらずまがらず、正しく眞直にことわれる」ということである。言い換えると、「正しき神代の傳説のこころ」にて理るということである。「古事記伝」の全巻を終えた頃に記された文であり、宣長には「正しき神代の傳説のこころ」が明確に把握されていたことを示すタイトル名である。

4.6. 中古と近代における異説出現の理由

中古と近代では、異説出現の事情が異なっている。中古は、学問の道がたいへん衰えていた時代なので、すべて例の漢籍の説にすがったことと、天下の人々ことごとく仏法を無上の尊い道と思い込み信じていたので、それらの人々に尊がられようと仏書の説を交えたこととを挙げる。一方、近代では、神代の伝説の中で、生り出る順序が先のほうが必ず尊いとする「後世の俗意」によって、天地のはじめ第一番に生り出た「天御中主神」を「天照大御神」より先の大祖の尊い神と考え、その後「天御中主神」に替わって、日本書紀において先立って現れた第一神の「國常立尊」を最も尊い神と考えた。これに対して宣長は、天地の成れるはじめ、あらゆる諸の神たちも、万国の人類も、万物も、みなことごとくこの神の「産靈の神徳」より成り出でたことから、高皇産靈尊が天地諸神萬物の大祖とする。またとり分けて帝王の大祖というべきは、天照大御神であるとする。このように宣長は、天津日（太陽）である天照大御神、食物の根元である豐受大神の「御靈」、そしてすべての根源であるこの高皇産靈尊の「産靈の神徳」を「正しき神代の傳説のこころ」の核心であると考えていた。宣長は、いのちの起始とそれを継承させる勢いを重く尊ぶことが神代の伝説のこころであると把握していたことが示唆される。

4.7. 旧説を改めること

宣長は、旧説すなわち異論は過失であるから、「よき時節」に改める必要があるという。もし改めないと、(1)天下後世までの人に笑われる、(2)先輩の恥を永く世に遺すことである、(3)「豐受大神」の「御食の大徳」を永く覆い隠してあらわさないことはこの神への恐れがすくなくないという問題が生じることを指摘する。そしてすべて過失のあるときは、「あらはして祓ひ清むるぞ、上古よりの憲法にして、然祓ひ清むれば、何事もみな改まりて、清まること也」という。「外國にても儒の道にも、過ちては、速に改むるをよしとし、佛の教にも、懺悔といふことあり」として、過失を改めることを促す。

4.8. 豐宇氣大神は「御靈實」である

神の「御靈」を察することができなくなると、神の「御靈」により生り出でた物自体を神と同定したり、その働きを人物に帰するようになる。「稲穂」は「豐受大神の神靈によりて、生れる」のであって、「稲穂すなはち其神なるにはあらず」という。なぜこのようにいわなければならなかったのか。古代から現代に至るまでの日本人と日本人にとって自己の隠喩である米との関係を論じた大貫美恵子は、日本人にとって、米＝魂＝神＝和魂(平和的、創造する力、正の力をもつ神）であり、食物摂取＝儀礼＝農業生産＝人間の再生産＝国体/まつりごと、であることを示した[9),10)]。このように稲穂自体が神であると一般には信じられていたが、宣長の見解は、当時の民衆の見解と異なっていた。吉見幸和氏の「外宮の御神をば、皇孫尊の天降らせ給ふ時の、供奉の臣列にして、膳部神也」とする異説は、神典には神は「現御身」の場合と「御靈實」の場合の区別があるという「神典のおもむき」を知らないために、例の漢意によりなしたものであるという。「豐宇氣大神も、御靈實にて、その御靈實、外宮に鎮坐よしなり」とし、「豐宇氣大神の御靈實」は、五部書の鏡説に同意して、「やむごとなきゆゑよしあるべき御鏡にぞ有べき」と推定する。

4.9. 国史に見えないことと神の軽重は別

日本紀などすべて、必ず記されるべき重い事も漏れていることがあり、またささやかな細事をも記されていることがあることを指摘する。それゆ

え「必しも國史に見えたると見えざるとを以て、其事の輕重は、定むべきにあらずかし」、これが「神典のおもむき」を明確にとらえることのできた宣長の結論である。この結論を前提として、宣長は「豐受大神」が「天照大御神」が天上で重く祭っていた神である証拠を挙げ、議論を展開してゆく。

4.10. 大長谷天皇（雄略天皇）の夢

豐受大神が「天照大御神の祭らせ給ふ神也といふ」証拠として、まず「延暦の外宮儀式帳」の記述を挙げ、次いで「神樂の取物の歌」を採りあげている。「延暦の外宮儀式帳」には、大長谷天皇（雄略天皇）の夢に、天照大御神が現れ、雄略天皇に教え諭した夢の内容が記述されている。この夢を記述した言葉に「心をつけて、よくよく味ひ見るべし」として詳細に検討して、宣長は次のように解釈した。すなわち天照大御神は高天原にて常に祭っていた「我御饌都神」である「等由氣大神」が、他国である「丹波國比沼乃眞奈井」に遠ざかっているために、たいへん苦しくしかも食事も安心してとれないので、自分のもとにいて欲しいと述べた。

「延暦の外宮儀式帳」の「我御饌都神」とは、「臣列の膳部神」ではなく、「我祭る御食つ神」という意味と解釈した理由を2つ挙げている。ひとつ目の理由は、「臣列の膳部神」が不在なら、天照大御神はたいへん苦しいとまで思われるであろうかという疑問である。2つ目の理由は、天照大御神が「等由氣神」とは呼ばないで「等由氣大神」と尊んで呼んでいることから、「大御饌毛安不聞食」の状態になったのは、食事の支度をする「臣列の膳部神」の不在ゆえではなく、「祭り給ふ御食の神の、近くましまさぬ故」であるとする。外宮において天照大御神の朝夕の食事を調理するのは、天照大御神がお祭りになる「豐受大神」を「齋祀りて、その御許に於て調じて奉るよし」であるとする。

4.11. 神樂の取物の歌のとよをか姫

豐受大神を天照大御神が天上で重く祭っていた神とする2つめの証拠として、宣長は「幣、みてぐらはわがにはあらず天にますとよをか姫の宮のみてぐら、みてぐらにならまし物をすべかみの御手にとられてなづさはるべく」で始まる「神樂の取物の歌」を挙げる。そして豐宇氣姫を豐乎加姫と「うたひ訛りたる物也」と考える。「すべかみの御手にとられて」は、「天照大御神の御手にとられて」であり、幣は、「とよをか姫の神を祭らせ給ふとての御幣」であるとする。

「等由氣大神」が、他国である「丹波國比沼乃眞奈井」に遠ざかっているとは、外宮の御神すなわち豐受大神の御靈實が、垂仁天皇の御時、天照大御神の御靈鏡と共に、倭姫に託されて、そのかみより、共に伊勢に鎮座しているはずなのに、雄略天皇の御世まで、丹波國に離れていたことをいう。宣長はその理由はわからないといったうえで、「丹波國風土記」のいわゆる羽衣伝説である「天女八人」の記述について言及し、それは、「かの皇孫尊の御天降の時、豐受大神の御靈實を、降し奉り給へる事」を「語傳へたるものなるべし」という。

4.12. 昔の両宮は争う私意がなかった

儀式帳などの書ざまを見ると、古の両宮は少しも争う私意が見えず、昔は互いに争おうとする心はなかったと思われ、尊いことだという。そしてその後生じた両宮の争いについては、一般に世の中に、このように二つに分れて並立するときには、おのずから互いに「妬忌の心」があって「勝劣高下」を争うことは「自然のいきほひにて、止めがたき世のならひ」であるとして、同情をしめす。しかしもしこの「二大御神の現御身」が目の前に見えているならば、このような「みだりなるわたくしごとども」は、決して申しあげるはずはないのに、今眼の前にお見えにならないし、言葉も発せられないので、なおざりに思って、「神慮のほど」を恐れないからであると続ける。そして宣長は、争いの心には「勝劣高下」の混同があることを指摘する。すなわち内宮外宮の「尊卑」を争うのは「いみじき俗意」であるという。なぜなら、神と神の関係は、天皇と神との間に比較を絶した区別があるように、比べることができるものではないので、どちらが尊いとか卑しいとかいうことができないものである。つまり「いみじき俗意」とは、尊卑がないところに尊卑を争うこころである。

このように一方では神と神との関係において尊卑はないが、他方では、両宮間においては「等差」すなわち「勝劣」があるとする。すなわち両宮の祭典は同等ではなく、外宮の祭典が内宮よりも劣るべきは無論であるとする。それは、祭神の尊卑によるのではなく、天皇と天皇が祭る天照大御神の間に相違があるように、天照大御神と、天照大

御神が祭る豐受大神の間の相違であるとする。このように「尊卑」と「勝劣」を区別したうえで、両宮の争いの論理を整理していう。外宮を尊くしようとする者は、みだりにただ外宮の尊い理由のみをいいたてて、その内宮に劣っている「すぢ」のことを覆い隠して言わない。外宮をおとそうとするものは、ただ内宮より劣っていることだけを引き出しいいたてて、外宮の尊い「すぢ」の事を、おおいかくしていわない。このように互いに争う心によるから、その心より生まれた論理は「みな直からず、平ならず、ひとむきにかたよれり」ということになるとする。

4.13. 女神であること

天照大御神は「帝王の大祖の御神」であるから女神であっては理屈に合わないというのは、「神典に旨」にそむくことを思わないで、ひたすら「漢籍のおもむき」に相違することだけを恐れることであり、「いとつたなき心にあらずや」という。そして、豐受大神も女神であるが、「何のあやしきことあらむ」と結ぶ。

4.14. 伊勢二宮さき竹の辨のまとめ

すでに述べたように両宮の祭神についての宣長の5つの結論は、(1)内宮の祭神＝天照大御神、(2)天照大御神＝太陽神、(3)外宮の祭神＝豐受大神、(4)豐受大神＝天照大御神が天上で重く祭っていた祭神、(5)豐受大神＝穀食の本元の御靈である御食津大神、である。宣長はこの5つの結論が、知る人がなくなった「神代の傳説のこころ」であるとする。それは天津日（太陽）である天照大御神と万国の人々の命をつなぐその国々の穀物の生み出す「御靈」の主体の豐受大神が連携して働くいのちへの恵みを尊ぶこころである。

宣長は、この根源的な神々が「神代に皇國に生出」たように、「萬の事の根元は、みな皇國より始まれること」であるという。そしてすべて外国には神代の正しい伝説がないのに対して、このように日本にはそれがあることから「皇國は、萬国の本つ國祖國」であると断定する。この宣長の結論に対しては、同時代の医者であり文人であった上田秋成をはじめ、大勢は非理性的な断定ととらえている。また、日本は、世界で他に比べるもののない、優れたくにがらの国であるという日本独特の「国体」観念を裏づける主張として政治的に利用されたこともあった。このように普遍的な性質の神の伝承が残るがゆえに、皇国を万国の祖国であるとする断定を、矛盾なく成立させ得るイメージ像は以下に述べるような生命活動にしかないように思われる。それは、万人への人間愛的行為をしながら、生殖により自らの子孫を後世に遺すような、あるいは副交感神経優位の状態で日常の平和な生命活動を行ないながら、ときには交感神経による戦うか逃げるか反応（fight-or-flight response）を起こすような生命体の臨機応変な適応活動の全体像である。

5．溝口睦子の古代史と古代文学の研究

「神代の傳説のこころ」を溝口睦子の古代史と古代文学の研究が明らかにした視点から分析をする。溝口睦子は、従来一枚岩的な文化だと思われてきた伝統文化のなかに、実は2つの異質な文化が並存した二元構造があったということを新しく問題提起しようとしている[11]。ヤマト王権時代（5−7世紀）は、高皇産靈尊に象徴される輸入した北方系の王権文化が、天照大御神に象徴される弥生以来の土着文化の上にかぶさって並存した二元構造の時代であるととらえ、そしてこの文化の二元構造は、記紀神話の二元構造に反映されるという。すなわち、4世紀以前の土着文化である天照大御神を含むイザナギ・イザナミ系神話と5−7世紀に北方ユーラシアの支配者の起源を天に求める文化である高皇産靈尊を主神とする天孫降臨神話である。このように4世紀末から5世紀初頭にかけての北方ユーラシアの文化受容以前の日本には、他に隔絶した唯一絶対の神はまだなかった。日本の神々の世界は、男女の神がその役割や特質にしたがって自由奔放に活躍する、多神教的世界だったという。創造神イザナキ・イザナミから生まれたとされる太陽神である天照大御神は、文字のまだ無かった弥生時代に遡る古い女神であったという。溝口は、天皇制思想は弥生に遡る日本土着の文化のなかから生まれたとする大勢の見方をとらず、日本がはじめて統一王権を形成した5世紀初頭に、機織や矢建築、金属加工や乗馬の風習など多くの先進技術・先進文化とともに朝鮮半島から導入した、元を辿れば北方ユーラシアの遊牧民の間にあった支配者起源神話にその源流をもつもの、すなわち当時の国際関係のなかから生まれたもの

とみている。

しかし7世紀末に、氏族制国家が終焉して律令国家に移ろうとするときには、一君万民の国家を支えるイデオロギーとしての一元的な世界観が必要とされようになった。中国の文字文化という新しい外来文化を受け容れ、強力に改革を推し進める天武天皇は、一方では歴史書の編纂を命じて、新しい中央集権国家を支えるイデオロギーとしての、神話の一元化をはかった。そのとき、皇祖神＝国家神として選び取られたのは、それまでずっと皇祖神の地位にあった高皇産靈尊ではなく、土着の太陽神である天照大御神であったという。このようにして人々に古くから親しまれている土着の太陽神であった天照大御神が高祖神・国家神としての役割も担うようになった。

以上の溝口の古代文化論の視点に基づいて宣長の「神代の傳説のこころ」をとらえなおすと、その姿が明確になる。宣長は高祖神・国家神である天照大御神の、万国を照らす天津日（太陽）として、万国の人々の命をつなぐその国々の穀物の生み出す「御靈（みたま）」の主体の豐受大神と連携していのちを育む役割にその根本的な性格を認めた。言い換えれば、宣長は、高祖神・国家神であるにもかかわらず天照大御神に、日本土着の文化のにおいを的確に嗅ぎとった。民俗学や文化人類学の研究者が明らかにしているように、古層の文化のなかには、女性の太陽神が世界中に広く分布していたという。高い文明をもつ国の男性太陽神におされて、女性太陽神の伝承は、徐々に姿を消したが、日本の天照大御神はそのなかで命脈を保ってきたひとりである。その意味において、天津日(太陽)である天照大御神と万国の人々の命をつなぐその国々の穀物の生み出す御靈（みたま）の主体の豐受大神が「神代に皇國に生出（なりいで）」たように、「萬の事の根元は、みな皇國より始まれること」であるとして、すべて外国には神代の正しい伝説がないのに対して、日本にはそれがあることから「皇國は、萬国の本つ國祖國（おやくに）」であるとした宣長の判断は鋭いといわざるを得ない。宣長は、豊かないのちの輝きを育むように働く神々の恵みを尊ぶこころを連綿として伝え続けている国という意味で根源的な国と呼んだのである。

6．おわりに

医者としての宣長は、医者が患者に気の勢いを察して、いのちをつなぐ気を敬うことが医学の原点であると把握した。学者としての宣長は、神代の時代の真の生き方はいのちを育む神々の恵みを敬うこころにあると把握した。「送藤文輿還肥序」と「伊勢二宮さき竹の辨」において一貫して見られる、気や神霊のように眼に見えない本質的な勢いを尊ぶことが、宣長のいのちの視野にあった。

7．要約

本論文は、宣長27歳のときの医論「争藤文輿還肥序（藤文輿肥（とうぶんよ）に帰るを送る序）」と晩年のエッセイ「伊勢二宮さき竹の辨」における宣長のいのちの視野を検証する試みであった。「送藤文輿還肥序」に表明された宣長の医学哲学の特徴は、生命現象の根本をなす気の性質は、測ることのできないものととらえたうえで、補われるものではなく養われるべきものと把握した点にある。宣長によると、食べ過ぎず、体を動かして飽きず、思い煩わないことが日常生活において気を養うことであり、真気の勢いを察したうえで、養気を目的として薬を使うことが医者の使命であった。宣長は「伊勢二宮さき竹の辨」において、神代の時代の真の生き方は、天津日（太陽）である天照大御神といのちをつなぐ穀物を生み出す豐受大神の御靈（みたま）の恵みを敬うこころにあると把握した。医者としての宣長は、医者が患者に気の勢いを察して、いのちをつなぐ気を敬うことが医学の原点であると把握した。学者としての宣長は、神代の時代の真の生き方はいのちを育む神々の恵みを敬うこころにあると把握した。「送藤文輿還肥序」と「伊勢二宮さき竹の辨」において一貫して見られる、気や神霊のように眼に見えない本質的な勢いを敬うことが、宣長のいのちの視野にあった。

引用・参考文献

1．松本　滋．本居宣長の思想と心理：アイデンティティー探求の軌跡．東京大学出版会；東京：1981．p.3．

2．Shigeru Matsumoto. Motoori Noroinaga 1730-1801. Harvard University Press; Massachusetts: 1970.

3．大野　晋．解題：醫者として本居宣長．In：本居宣長全集．第19巻．筑摩書房；東京：1973．p.10．
4．詩文稿．In：本居宣長全集．第18巻．筑摩書房；東京：1973．pp.8-11
5．髙橋正夫．本居宣長：済世の医心．講談社学術文庫．講談社；東京：1986．
6．藤井義博．貝原益軒の養生術 ── 栄養療法の知的枠組みについての研究6 ──．藤女子大学紀要（第Ⅱ部）2009；46：43-51．
7．本居宣長全集．第19巻．筑摩書房；東京：1973．p.837．
8．中西正幸．益谷末寿の両宮観．In：伊勢の宮人．国書刊行会；東京：1998．pp.249-282．
9．大貫美恵子．コメの人類学．岩波書店；東京：1995．
10．Emiko Ohnuki-Tierney. Rice as self: Japanese identities through time. Princeton University Press; New Jersey: 1993.
11．溝口睦子．アマテラスの誕生 ── 古代王権の源流を探る．岩波新書．岩波書店；東京：2009．